
君といた日

高村恵美

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

君といた日

【Nコード】

N3421A

【作者名】

高村恵美

【あらすじ】

来栖くるすが中学校の入学式前の教室で出会ったクラスメートは奈津だった。バレー部に入部した2人は、互いに意識しあうようになるが、「中学生」という現実が2人の前に立ちはだかる。

「君といた夏は遠い夢の中 空に消えてった打ち上げ花火」

「ねえねえ、クラスどこだった？」

「今年同じクラスだよ！」

桜吹雪が舞う中学校の入学式。校庭に貼り出されたクラス分けの表の前で、そんな会話が行われる。ほとんどが顔なじみのように見える。僕はその表によれば、1年1組らしい。

表に従って、校舎の1階にある教室に入る。

中には既に何人か入っていて、真新しい制服を着ておしゃべりをしている。

出席番号順に席に着くように黒板に書かれ、ご丁寧に座席表まで黒板に書かれている。どうやら、僕の席は窓際が一番後ろらしい。暖かい日差しが、心地よい眠気を誘いそうな席だ。案の定、席に着くと、信じられないほどのぼかぼかした陽気で、すぐに眠気が襲ってきた。

席に着くと、窓際に立って外を眺めていた、長い髪を三つ編みにした女子が話しかけてきた。

「見かけない顔ね。」

そりゃそうだ。僕は小学校卒業と同時に、父親の転勤で、東京からこの静岡に来たんだから。

「あんたは？」

うとうとしかけていたところを起こされたので、少し不機嫌な声で聞く。

「私は杉浦奈津。奈津って呼んでくれていいわ。」

少し不機嫌な僕とは逆に、奈津は機嫌が良さそうだ。

少し唐突だったが、自己紹介されてしまったので、僕からも自己紹介をする。

「崎島来栖。東京から引つ越してきたんだ。」
そう言うと、奈津は

「それで見えたことなかったんだ。この中学はほとんど小学校からの持ち上がりだから、みんな顔なじみなのよ。」
と言った。それでみんな顔なじみな会話をしていたのか。

「席も隣なんだし、よろしくね。」
黒板の座席表には、確かに俺の隣の欄に「杉浦」と名前が書かれている。

話しているうちに、眠気なんかどつかにいつてしまった。奈津はそれくらいよくしゃべる女の子だった。

そんな日が続く、僕は一気に仲良くなっていった。奈津は女の子と言うよりも、サバサバした男友達のような感じで付き合える、さっぱりした性格だった。だからと言って、がさつな感じはしない。女子からも男子からも好かれる奴だった。

4月も後半に入ると、部活は全員参加のうちの学校、1年生も部活に仮入部し、練習に参加するようになった。

僕は男子バレー部に、奈津もマネージャーとして男子バレー部に入部した。

毎日、マネージャーとして部員の間を駆け回る奈津に、僕はいつの間にか恋心と呼べるものを抱いていたし、時々、奈津の方からも視線を感じることがあった。

5月、ゴールデンウィークが終わると、学年行事である宿泊訓練が2泊3日で行われた。場所は浜名湖の北にある三ヶ日青年の家。ここでは、集団規律を身につけると同時に、クラスメートとの交流を深めるという目的もある。

そのため、浜名湖周辺を歩く10キロウォークラリーや肝試し、全員でボートを漕ぐカッターにも乗った。グループは出席番号順で分けられるため、僕は必ずと言っていいほど、奈津と同じグループ

だった。

夜、バンガローで布団を敷いて、その上でゴロゴロしていると、携帯が鳴ってメールの着信を告げた。メールは奈津からのものだった。

『テラスに出てみて。星がすごいたくさん見えるよ！ 星が降るって、こんな感じなんだろうな。』

確かに僕たちが住んでいるのは浜松市で、かなり大きい街だから山の方まで行かないと、あまり星は見えない。街中だと、街頭の光が邪魔になるのだ。特に僕は、今まで東京の真ん中で育ったから、降るような星は見たことがない。

僕はジャージの上着を羽織って、テラスに出た。通路を挟んで向かいにある女子のバンガローのテラスには、ジャージ姿の奈津がいる。空を見上げると、確かに降るような星空だ。

「どうした？」

「こんなにたくさん星、見たの初めてだから……。」「通路を挟んで向かい合って話す。このテラスの柵が邪魔だ。

奈津は唐突に言った。入学式の日の、あの自己紹介のように。

「私と付き合ってくれない？」

「へ？」

正直、それしか台詞が出てこなかった。確かに奈津のことは好きだけど、まだ中学1年生だし、付き合うということまでは頭が回らなかった。

「私ね、実は夏休みに引越すの。」「

僕の返事を待たずに、奈津が言い出した。

「……。」「

僕は何も言えなかった。奈津が引越すだって？

「どこに引越す？」

ようやく出た声は、かすれていた。それでも奈津には届いたらしい。

「ドイツ。お父さんの会社の取引先が、向こうにあって、長期海外派遣なんだって。」

ドイツだって？ 海外じゃないか。僕らは中学生だぞ。ドイツまで行けるか。

僕の心は決まった。

「よろしく。」

こうして僕らは付き合うことになった。

付き合い始めて1ヶ月半が過ぎようとしていた。僕はその日、奈津を隣の夏祭りに誘った。

奈津の家の近くの公園で待ち合わせて、待っているとちらほらと浴衣姿の女性が歩いている。やっぱり、僕らと同じように夏祭りに行くのだろうか。

「お待たせ。」

そう言われて振り向くと、紺地に白い朝顔の模様が入った浴衣を着て、黄色と赤の合わせの帯を締めていた。いつも三つ編みの髪をアップにして、うっすらと化粧もしているのか、くちびるがほんのりピンク色に色づいている。

「来栖？」

その姿に不覚にも少しみとれてしまった。

「いや、何でもなし。行こうか。」

隣に立つと、ふわりと清潔なシャンプーの香りがした。遅れたのはこのせいだったのか。その時、ふと奈津に“女”を感じて、どきつとした。

「いやー、すごい人ー。」

神社に着くと人でごった返していた。空はもう夕暮れがせまってきたいて、茜色と紺色のグラデーションができあがっている。紺色の部分には一番星が輝いていたりする。

「ねえねえ、金魚すくいだよ。」

出店と出店の間を歩いていると、奈津が僕のTシャツのすそをひ

つぱった。結構子供っぽい？ さっき不覚にも“女”として意識したのに……。

「あ、トウモロコシー。」

次から次へと目移りしているらしい。

「おいしそう。」

そう言えばお腹も空いてきた。トウモロコシを自分の分と2本買ってやると、奈津は目をキラキラさせて、それに威勢よくかぶりついた。……飯でなくても女の子なんだから、もう少しかわいく食べて欲しかった……。

それから僕らは焼きイカ、焼きそば、リンゴあめなど、よく食べた。一通り食べ終わっただろうか、神社の奥の石段で少し休もうかという話になって、僕らは奥に向かって歩き出した。その時、奈津が僕からつつつと離れて歩き出した。

「？」

前を向くと、その理由はすぐにわかった。前からクラスメートの柴崎が歩いてきていた。

「奈津。」

その柴崎が声をかけた。奈津とは二言三言話してすぐに別れて、僕の後ろの方へ歩いていった。

「ごめんね、離れちゃって。」

柴崎の姿が見えなくなると、奈津は僕の所にもどってきた。

その姿はあまりにもかわいい。おもわず人混みの中でも抱きしめたくなるくらいだ。

石段に座ってぼやーとした暗闇の中、僕らはひとしきり話をした。

「私、高校卒業したら、またここにもどってきたいな。」

「……。」

僕は何も言わずに次の言葉を待つ。

「来栖の所にもどってきたいの。」

「……その時には、僕には別に付き合っている人がいたとしても？」

少し意地悪な質問を試してみた。すると奈津は、まっすぐに僕を見て、間髪入れずに言った。

「そのときは彼女から奪うかもね。来栖、覚悟しておいてよ？」
結構大丈夫そうだ。

境内に向き直ると、相変わらずすごい混雑ぶり。どこをみても人人人だ。

ふと僕らの目があった。そして僕らはどちらからともなく顔を近づけ、目を閉じた。

くちびるが触れるだけのキスだったけど、どのくらいそうしていただろう。ほんの数秒だったのかもしれない。

くちびるを離すと、奈津は僕の肩に頭をちょこんとのせてきた。

「来栖……。」

「うん？」

かすめるような声だった。けれど、ふるえているのがわかる。

「もどってくるからね。」

「うん。もどってこいよ。」

奈津の目には水が溜まっていて、それを人差し指でぬぐってやる。

僕らはもう一度、くちびるを合わせた。

みーんみーん……

あっという間に夏休みになった。今日は奈津がドイツへ行く日だ。僕は駅まで見送りに出た。

「来栖、私のこと待っててよね？」

にやつと奈津が笑って言う。そのつもりはないが、もし裏切ろうものなら、後が怖そうだ。

「心配しないで行ってこいよ。手紙もよこせよ？ 忙しいから返事は遅くなるかも知れないけど、必ず書くから。」

「うん。」

「奈津、行くわよ。」

奈津のお母さんが声をかけた。

「はい。」

東京行きの新幹線が、あと5分で入ってくる。そろそろ行かないと間に合わなくなる。

「行ってこい。待っててやるから。その代わり、帰って来いよ。」

「うん。じゃ、またね。」

そう言つと、奈津は背中を見せて、改札をくぐっていった。改札を入った所の階段で一度振り向いて、大きく手を振った。僕も手を振り返す。

あれから7年の月日が流れた。奈津はどうしているだろう。高校に入ったところから、お互い忙しくなり、手紙も滞りがちで、ここ2、3年は一通も手紙が来ていない。

僕は相変わらず1人で、今は大学生だ。

「いらつしやいませ。」

今は喫茶店でバイト中。昼下がり、ガラガラの店内に入ってきた女性客の所へ、水とおしぼりを持っていく。

置いて帰ろうとした時、声をかけられた。

「来栖？」

名前を呼ばれたせいもあるが、思わずどきつとするくらい、奈津の声に似ていた。

「え？」

「私よ、奈津。戻ってきたの。」

そう言えばどこことなく面影がある。黒かった髪は少し茶色に染められていて、長い髪にはウェーブがかかっているが、確かに奈津だ。「7年ぶりだな。今バイトだけど、あと30分で終わるんだ。時間あるなら、待っててくれないか？」

「うん。」

(後書き)

久々に中学生を主人公にした小説を書きました。主人公たちが中学生ということで、あまりドロドロしたものは書かなかつたつもりです。

君といた日

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3421a/>

君といた日

2008年11月7日07時46分発行